日本文学作品精选

日·本·文·学·読·本·精·華

主审◎宋协毅　主编◎杨红　副主编◎张艳菊　林乐常

大连理工大学出版社

日本文学作品选

日·本·文·学·読·本·精·華

主审◎宋协毅　主编◎杨红　副主编◎张乐常

大连理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本文学作品精选：日文 / 杨红主编. — 大连：大连理工大学出版社，2011.3
ISBN 978-7-5611-5879-1

Ⅰ. ①日… Ⅱ. ①杨… Ⅲ. ①日语—汉语—对照读物 ②文学—作品综合集—日本 Ⅳ. ①H369.4:I

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第 208424 号

大连理工大学出版社出版
地址：大连市软件园路 80 号 邮政编码：116023
发行：0411-84708842 邮购：0411-84703636 传真：0411-84701466
E-mail：dutp@dutp.cn URL：http://www.dutp.cn
大连印刷三厂印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸：140mm×203mm 印张：12.375 字数：310 千字
印数：1～2000
2011 年 3 月第 1 版 2011 年 3 月第 1 次印刷

责任编辑：宋锦绣 责任校对：张 宇
封面设计：李 雷

ISBN 978-7-5611-5879-1 定 价：25.00 元

前　言

本教材是为大学日语专业高级阶段学生及日语学习爱好者提供的专用日本文学教材,也适用于日语专业硕士的日本文学课程。编者从事日本文学教学多年,总是为找不到一本合适的文学教材而苦恼。以往的日本文学教材侧重于对近现代小说的单一罗列和介绍，缺少体系性，且文章相对冗长。而本教材不同于以往的日本文学教材，具有以下两大特色:

1. 全新的体系，丰富的内容。

编者在日本文学教学实践中深深体会到，以往的文学教材中，只能让学生掌握教材中所列举的内容，而该作品属于哪个时代哪个流派都很模糊。针对这一问题，编者在编写本教材时，在介绍日本著名作家及作品的同时，都系统地将各时期日本文学史的相关概述穿插在该时期作品的前面，使学生既可以学到名家名篇，也对该时期的文学概况有全面的了解。

同时本教材摒弃了现有文学教材只重视近现代作品的弊端，特别是研究生升学考试时，古典文学作品也是不可缺少的部分。

第一部分内容选择了古典文学作品。考虑到学生对古典语法比较薄弱的问题，本书只选择了具有代表性的两篇作品，但添加了各时代古典文学的文学概述，力争做到以点带面，希望对古典文学有兴趣的学生有目的地进行课外阅读从而起到指导性作用。

第二部分近现代小说是本书的重点部分，这一部分主要是按文学流派分别选择了15篇小说，并把这些作品按年代的远近进行排列，使学生一目了然。

第三部分是评论篇，该部分主要收录了具有代表性的文学评论。

第四部分是现代诗歌篇，让学生能够掌握日本现代诗歌的基本知识。

可以说本教材在体系上不仅按年代顺序进行了编排，而且兼顾各时期的文学史概观。这样使学生在学习过程中既能欣赏到丰富的日本古典文学作品、近现代小说、文学评论、现代诗歌的丰富内容，又能对日本文学史有一个纵向的、全方位的系统把握，对日本文学的了解更加系统、全面。

2. 全新的结构，丰富的题材。

以往的文学教材偏重于近现代小说的介绍。本教材除了重点介绍近现代小说外还有其他形式作品的选材。如在古典篇、评论篇、现代诗歌篇中收录了题材丰富的名篇名著。特别是现代诗歌篇，又细分为现代诗、现代俳句、现代短歌。这同时也是为了满足该方面的爱好者及研究生升学考试的要求，也是迄今为止其他教科书未曾尝试的新形式。本教材题材极其丰富，令人耳目一新。

本教材旨在使广大日语学习爱好者在欣赏优秀作品的同时也能掌握日本文学史的相关知识。并且也给广大日本文学爱好者提供可供欣赏的空间，使日本文学研究有章可循。

本教材在编写过程中得到了社会各界的支持，在此表示衷心的感谢。在本教材的策划及审核的过程中得到了大连大学宋协毅副校长的关心及大力帮助，借此机会表示深深谢意。

最后希望本教材能对各位日语学习者的文学学习有所帮助，能给日本文学教材的编写带来新的希望。

编者　按

2011年1月1日

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

目　录

第一部分　古典篇 …… 001
古典文学概観 …… 002
第1課　古事記上巻 …… 012
第2課　枕草子 …… 018

第二部分　近現代篇 …… 023
日本近代文学の概観 …… 024
第3課　浮雲（抄録） …… 046
第4課　金色夜叉（抄録） …… 055
第5課　高野聖（抄録） …… 072
第6課　破戒（抄録） …… 082
第7課　高瀬舟 …… 098
第8課　坊っちゃん …… 115
第9課　刺青 …… 142
第10課　范の犯罪 …… 158
第11課　羅生門 …… 178
第12課　蟹工船 …… 193
第13課　伊豆の踊子 …… 219
第14課　風立ちぬ（抄録） …… 253
第15課　人間失格（抄録） …… 274
第16課　晩菊 …… 295
第17課　他人の足 …… 322

第三部分　评论篇 …… 349
日本文学評論の概観 …… 350
第18課　理性としての眼 …… 352
第19課　言葉と身体 …… 358

第四部分　现代诗歌篇 …… 367
現代詩の概観 …… 368
第20課　現代詩鑑賞 …… 373
秋刀魚（さんま）の歌 …… 373

現代俳句の概観 …… 378
第21課　俳句鑑賞 …… 380
1. 正岡子規（まさおかしき） …… 380
2. 高浜虚子（たかはまきょし） …… 382
3. 水原秋桜子 …… 383

現代短歌の概観 …… 384
第22課　現代短歌鑑賞 …… 387
1. 与謝野鉄幹の短歌 …… 387
2. 石川啄木の短歌 …… 388
3. 北原白秋の短歌 …… 389

参考文献 …… 390

第一部分

古典篇

古典文学概観

一、古代前期の文学概観

大和時代は、大和朝廷が成立したとき（記紀伝説に、神武天皇が橿原の宮で即位とある）から、桓武天皇が794年に平安京（京都）に遷都するまでの間の、主として大和の地に都のあった期間で、文学史上、古代または上代とよばれる。このうち、元明天皇から光仁天皇に至る7代75年の間（710—784）の、都が平城京（奈良）にあった期間を、特に奈良時代という。古代前期は、おおかた5世紀ごろから8世紀まで、すなわち文学の発生から794年の平安遷都までの間を指す。

（一）大和時代（口承文学時代）

東に春日・三輪、西に生駒、南に吉野。美しくかすむ山々を遠く、明るく開けた大和平野—。大和朝廷はこの土地にその基礎をきずき、長い間、大陸文化の影響をうけて栄えてきた。この間、 応神天皇の16年（5世紀ころ）に百済から文字が伝来して、日本の文学は口誦（伝承）文学時代から、記載文学の時代に移っていった。推古天皇の15年（607）、聖徳太子が隋に小野妹子を派遣して以来、7世紀から8世紀にかけての遣隋使・遣唐使などによる隋唐文化の流入と仏教文化の興隆は、日本の

制度・文学・芸術の各方面に美しい花を咲かせていった。

大陸から漢字が伝来する以前の、まだ文字というものがなかった、原始時代の日本では、神（超人間的なもの）に対する祈りのコトバや呪文、労働歌・舞踏歌・祭葬歌などの歌謡、祖先や氏の由来に関する物語などが、口から口へと語り継ぎ、うたい伝えられてきた。こうした原始的な文学を、ふつう口誦文学または伝承文学という。

これらの言い伝えのうち、自然に消滅してしまうものもあったが、あるものは民衆や語部（伝承を職業としたものあ）によって伝えられ、記載文学時代にはいってからは、文学として記録されるに至った。

日本最古の文献である『古事記』（712）には、神代から大和朝廷に至るまでの皇室発展の歴史を中心に、神に関する伝説、架空的な民間説話、美しい歌謡などが、力づよい素朴な筆づかいで生き生きと文学的に描かれている。『日本書紀』（720）は、『古事記』よりさらに詳細に、歴史的態度でこれを扱い、『出雲風土記』（733）などの風土記にも、土地に関する記録のほか、神話や伝説を記載しているものがある。

（二）奈良時代（記載文学時代）

元明天皇が即位すると、平城の地（奈良）に新都造営がきまり、710年に唐の都長安にならって建設された、条坊整然とした平城京に遷都が行われた。新都には東大寺以下の大寺院が甍を競い、その堂塔の丹の色は、四囲の樹木の緑に照り映えた。

一方、氏族が統一され、律令が制定され、中央集権が確立さ

れ、国家の体制が整備されて民族の意識が高まるにつれて、国家の歴史や郷土の地誌をまとめようとする機運が起こり、712年には太安万侶筆録の『古事記』が完成した。その翌年には風土記の作成が諸国に命じられ、720年には、舎人親王・太安万侶ら撰の『日本書紀』が撰進された。

これらの記紀・風土記に見られる上古の純真で素朴な歌謡は、国民の文学意識の向上に伴ってしだいに芸術的に高められ、すぐれた叙情歌や叙事・叙景の歌をつぎつぎと生み出してゆき、ついに大伴家持らの編集とみられている一大国民歌集たる『万葉集』の成立をみるに至った。天智天皇・額田王・柿本人麻呂・山部赤人・大伴旅人・山上憶良・高橋虫麻呂・大伴旅人らの“万葉歌人”がよんだ不朽の名歌は、後世の日本文学に大きな影響を与えた。

奈良時代には、また、漢詩文が盛んに作られ、751年には、日本最初の漢詩集である『懐風藻』が成立した。

このほか、言霊信仰にもとづく宗教文学としての「祝詞」と、国文で書いた詔勅を意味する宣命がある。

上代の人々は、コトバには神秘的な魂が宿っていて、よいコトバをとなえればそのコトバの霊の力によってよい結果を招くことができ、反対に悪いコトバをとなえれば不吉なことが起こると信じていた。これを言霊信仰という。

『万葉集』（340～759）にも、日本は「言霊の幸はふ国」「言霊の佐くる国」、つまり言霊の力によって繁栄する国である、とうたわれている。

この言霊信仰に基づいて発達してきたものに「祝詞」があ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

る。古代にあっては祭祀も政治もともに“マツリゴト”であって、祭祀は国家の重大事であった。この祭祀のときに神前に告げ奏し、あるいは祈願をするコトバが「祝詞」であり、「祝詞」の一種に「寿詞」があり、「祝詞」の系統を引くものに「宣命」がある。

二、古代後期の文学概観

文学史上、普通、古代後期を中古ともいう。すなわち桓武天皇の平安京遷都（794）から鎌倉幕府の成立（1192）までの約400年間を指す。また、平安時代とも呼ばれる。

（一）平安前期（律令政治時代）

平安前期（9世紀）は、大化の改新以来の律令以来の律令国家体制が完成、皇室の尊厳はゆるぎない権威を示し、前代にひきつづいて唐文化の心酔模倣が行われ、文学の上では、嵯峨天皇の弘仁年間には漢詩文が全盛期を迎え、『凌雲新集』（814）以下の勅撰がつぎつぎ成立した。これに反して和歌はまったく沈滞して、国文学にはみるべきものがなかった時期である。

（二）平安中期（摂関政治時代）

平安中期（10～11世紀前半）は、いわゆる貴族文学・女流文学の黄金時代である。政治の面では、藤原氏は、大化の改新の功臣、鎌足・不比等以来、常に最も有力な官吏として朝廷に仕えてきたが、嵯峨天皇のときに冬嗣が出て天皇の信任を得、つ

いでその子良房が清和天皇の外祖父として太政大臣となり、のちに摂政となるに及んで、他の諸氏を圧してその勢力を確立した。つづいて良房の子の基経も摂政・関白となり、以後藤原一族は代々皇室の外戚となり、天皇幼少のおりは摂政、長ずれば関白として政権を壟断し、ここにいわゆる藤原氏の摂関政治が実現した。

一方、唐末の内乱勃発を契機に、宇多天皇の代、894年9月、遣唐使菅原道真の発遣が停止されてから、唐文化熱もようやくさめ、国風文化が急速に発達した。

文学の面では、『古今和歌集』（905）を皮切りに『後撰和歌集』（年代不詳）、『拾遺和歌集』（1005～07）と和歌が興隆の勢いをみせ、在原業平、・紀貫之・藤原公任・和泉式部・藤原俊成・西行らの大歌人が続出し、和歌は日本文学の主流を占めるに至った。また、『竹取物語』（年代不詳）、『伊勢物語』（平安初期）につづく『大和物語』（947～957）、『宇津保物語』（10世紀後半）、『落窪物語』（10世紀末）、そして王朝文学の最高峰『源氏物語』（1004～1013）と、『土佐日記』（935）から『蜻蛉日記』（974）、『枕草子』（1000）、『和泉式部日記』（平安中期）、『更級日記』（1060）等々の、物語と日記・随筆が全盛期を迎えた。またこの期にはかな文字が流行して、紫式部、清少納言、菅原孝標女をはじめとして、多くの女流作家・随筆家・歌人が各ジャンルに活躍して、藤原氏を主軸とする貴族社会の繁栄とともに、女性的な「もののあはれ」の情緒が、文学の基調をなした。

（三）平安後期（院政時代）

平安後期（11世紀～12世紀末）は、栄華と宴遊に堕落した藤原氏の摂関政治のあとをうけて、院政が行われた時代である。これと並行して、すでに源平二氏をもって代表される新興の豪族は、中央の威令の行われなくなった地方に根をはっていたが、1156年の保元の乱、1159年の平治の乱を契機として、中央の政界に進出してきた。

この期の文学を代表するものは、『栄華物語』（前編30巻平安中期、後編10巻平安後期）、『大鏡』（平安後期）をはじめとする歴史物語と、『今昔物語』（12世紀前半）の系統をひく説話文学である。前者は滅びゆく藤原貴族の往時の栄華を回顧したものであり、後者は庶民の素朴な生活を写し出したものである。社会の移り変わりとともに、文学また、古典貴族文学から新興庶民文学へと大きく変容していった。

三、中世の文学（鎌倉、室町時代）概観

中世というのは、鎌倉政府成立（1192）から、江戸幕府成立（1603）までの約400年間の歴史を指す。政治史には、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、安土・桃山時代に分けられている。平安時代を中古とよび、鎌倉室町時代をそれに対比して近古と呼ぶ学者もいる。

（一）鎌倉時代

鎌倉時代は、平安時代の貴族文化から江戸時代の庶民文化への大きな転換期となった時代で、室町時代とともにいわゆ

る武家文化の時代である。新興武士階級の著しい進出につれて、前代からうけつがれた伝統的な和歌・物語がしだいに衰退して、ここに『保元物語』（1220）、『平治物語』（鎌倉時代前期）、『平家物語』（鎌倉時代前期）、『源平盛衰記』（1249）、『太平記』（1370）などの軍記物語が文学の主流をなした。平家一門の栄枯盛衰を主題とした『平家物語』は、軍記物語の代表作で、琵琶に合わせて琵琶法師の語る平曲として民間に流布した。

また、この時代は戦乱日につぎ、世相の変転はきわまりなく、あわせて念仏宗・浄土宗・浄土真宗・時宗・日蓮宗などの新仏教の興隆と禅宗の伝来とは、広く人々の心に無常観を植えつけた。この思想は軍記物語を初めとして、鴨長明、兼好法師らの隠者の文学にも濃厚に現れている。『今昔物語』の系統をうける説話文学には、『宇治拾遺物語』（1218）、『十訓抄』（1252）、『古今著聞集』（1254）などがあり、当時の世相をよく反映している。

（二）室町時代（室町時代・安土桃山時代）

室町時代の『新古今和歌集』（1205）、『金槐和歌集』（1213）以後、沈滞不振をつづけていた和歌にかわって連歌が流行した。連歌はこの期を代表する文芸で、武士僧侶の社会に発達し、二条良基、宗祇らが指導的役割を演じた。また能楽が観阿弥・世阿弥父子によって大成され、狂言がこれに付随して行われた。鎌倉時代に作られた『住吉物語』（原本は平安中期、現存は鎌倉初期）、『石清水物語』（1249～1271）などの

擬古物語と、『宇治拾遺物語』（1218）などの説話文学の流れをうけて発生したお伽草子は、当時の教養の低い民衆に喜ばれて、江戸時代の庶民文学の源流となった。

漢詩文は、平安時代後期以来まったく衰えていたが、学才ある京都の五山禅僧によって高められ維持された。室町時代も末ごろになると、キリスト教伝道のため渡来した宣教師らが、主として宗教的な文学の著述・出版に活動した。これをキリシタン文学という。

四、近世の文学概観

徳川家康が1603年、征夷大将軍も任ぜられ、江戸に幕府を開いてから、第15代将軍徳川慶喜が政権を朝廷に奉還して明治の新政府が発足する1868年までの、およそ266年の間で、文学史上、ふつう近世とよばれる。

（一）江戸時代前期（上方時代）

江戸時代は、織、豊二氏の中央集権のあとをうけて、徳川幕府が江戸に政治の中心を移し、幕藩体制をしいて以後の約二世紀半の間で、実質的には経済力を握った人が、武士・僧侶にかわって栄えた平和な時代である。

文学の面では、武士階級は前代からの伝統的な、漢詩文・和歌・連歌・擬古文・謡曲などをうけついだが、新興町人階級には、その嗜好に応じた娯楽的な読み物の類を主流に、川柳・狂歌・浄瑠璃、歌舞伎などの各種の新文学が起こった。加えるに印刷術の発達は、これらの庶民文学の盛行に拍車をかけた。

江戸時代の文学は、前後二期にわけて考えることができるが、前期は元禄期を中心とする上方文学時代であり、後期は文化・文政を中心とする江戸文学時代である。

新文学は、まず京阪の地を中心として起こったのであるが、この期において、井原西鶴は仮名草子から発展した浮世草子の作家として活躍し、『好色一代男』（1682）、『武家義理物語』（1688）、『日本永代蔵』（1688）と、好色物・武家物・町人物に健筆を振るった。芭蕉は蕉風俳諧によって幽玄閑寂を旨とした新境地を開き、『奥の細道』（1694）、『笈の小文』（1688）などの俳諧紀行にこれを示した。近松門左衛門は戯曲の面において浄瑠璃の新体を完成し、『出世景清』などの時代物、『冥途の飛脚』（1711）などの世話物で、世の喝采を浴びた。小説に俳諧に戯曲に、輝かしい金字塔を樹立したこの三作家は、まさに期せずして文学の三ジャンルに同時に出現した、元禄文壇の三巨人である。

一方、長い間衰微していた漢学は、『林羅山』が幕府の儒官として徳川家康に重く用いられ、朱子学が官学となるに及んで、再び盛んになり、石川丈山、伊藤仁斎、新井白石、荻生徂徠らの、多くの儒学者が輩出した。元禄期には、復古精神が起こって、僧契沖、荷田春満らの古典研究に始まる国学も、目覚しい発達を遂げた。

（二）江戸時代後期（江戸文学時代）

ついで文学の中心は江戸に移り、江戸人の好みに応じた、川柳・狂歌・読本・洒落本・滑稽本・人情本・合巻などの、遊

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com